



ダイハツ九州の歩み

1996年	ダイハツ工業、中津市と立地協定締結	
2004年	大分工場が操業開始	ハイゼットトラック (04年～)
06年	商号を「ダイハツ車体」から「ダイハツ九州」に変更	
07年	第2工場が操業開始	ミライース (11年～)
08年	エンジン生産の久留米工場が操業開始	
19年	生産累計500万台達成	ムーヴキャンパス (22年～)
22年	年度生産台数が過去最多を更新(48万1780台)	
23年	親会社の認証不正問題で大分工場が約2カ月間操業停止(12月～24年2月)	

本格操業20年

軽自動車メーカーのダイハツ九州が大分工場（中津市昭和新田）で本格操業を始めて、12月で20年を迎えた。グループの主力工場として乗用、商用車の生産を拡大し、2022年度には過去最大の48万台を記録。約4千人の雇用創出、県北部の関連企業の集積など地域経済をけん引してきた。一方で昨年12月に親会社の認証不正問題で稼働を約2カ月間停止する事態に陥った。取引先の休業や宿泊、飲食業の売り上げ減に波及し、企業城下町の抱えるリスクも顕在化した。

ダイハツ九州 県経済けん引

「20年間の温かい支援への感謝を忘れず、大分の経済発展に貢献し、喜んでいただける車造りにまい進する」。今後、取材に対し、日野克浩社長(62)はこれまでの歩みを振り返りコメントした。

前橋市にあった前身ダイハツ車体の工場老朽化に伴い、親会社ダイハツ工業(大阪府池田市)は広大な用地が見込める中津市への全面移転を決め、1996年に市と立地協定を結んだ。最新設備を導入した拠点として、2004年12月20日、大分工場の竣工式があり本格操業がスタートした。県や中津市の動きかけで国の重要港湾に昇格した中津港を通じ、完成車の広域輸送を展開。07年に隣接地に第2工場、08年には福岡県久留米市にエンジン生産を担う工場をそれぞれ建設、商用「ハイゼットトラック」や乗用「ミライース」といった主力商品の生産を伸ばしていった。

ダイハツ車体時代から取引のあった部品メーカーな

雇用創出や関連企業集積

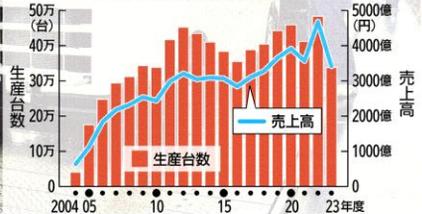
1社依存の危うさも

とも相次いで大分県内に進出。県企業立地推進課によると、03年度以降で自動車関連の29社が工場などを構え、設備投資は少なくとも250億円以上とみられる。

地場企業の自動車産業への参入も後押しした。金属表面処理の九州ケミカル(豊後高田市)は06年大分、福岡両県の部品加工会社など6社が共同出資して誕生した。当時は大分県内になかった車向けのめっき処理で成長し、今は複数の自動車メーカーと取引する。野上忠幸管理部長(56)は



生産台数と売上高



「未経験の分野で試行錯誤し、商機を切り開くことができた」と語る。

産官学でつくる県自動車関連企業会も06年に発足。会員企業は当初の80社から149社に増えた。ダイハツ九州の技術者がサポーターや県内外で商談のマッチングにつなげた。22年度は467.8億円と県内有数の売上高を誇る同社の業績によれば、地域経済への影響も大きくなる負の側面も露呈した。

ダイハツ工業の認証不正問題で大分工場も生産を停

止し、全車種の再開までは約5カ月間かかった。県内の取引先の一部は休業を強いられ、地域のホテルや飲食店も客足減にあえいだ。製品の大半がダイハツ向けで、一時稼働を止めた部品工場の責任者は「1社に依存する危うさを痛感した。教訓として別の自動車メーカーや他業種への営業も力を入れ始めた」と語る。

それでも裾野の広い産業を大分に根付かせた実績や今後の期待は大きい。地場シンクタンク大銀経済経営研究所の川野恭輔業務本部長(54)は「進出により大分県の産業の足腰が強くなったのは間違いない」と話す。

県自動車関連企業会の井上光範会長(68)は「今後もダイハツ九州と関連企業で人材育成や技術力の向上に取り組み、経済成長と地域貢献を目指す」と力を込めた。(吉良政宣)

ダイハツグループで九州社は軽自動車生産の最大拠点になり全体の73%を手がける。現在は商用ハイゼットカーゴ、乗用「タフト」を含め6車種を生産している。従業員数は約4500人で、うち大分工場が約4千人。久留米工場が約500人。認証不正問題の影響で2023年度生産台数は33万6421台(22年度比30.2%減)、売上高は341.7億円(同27.0%減)に落ち込んだ。



〔問①〕 ダイハツ九州大分工場では、2022年度に過去最多の生産台数を記録しました。
何台ですか。

〔問②〕 企業城下町の抱えるリスク、「1社依存の危うさ」とは、どういったことですか？

〔問③〕 自動車産業の抱える課題を調べ、自分の考えを書こう。